平成26年度 前橋・高崎連携事業文化財展

東国千年の都

石を使って3万年
ー削る・飾る・祈るー

平成19年度から開催している前橋・高崎連携事業文化財展も、今年度で8回目を迎えます。毎年様々なテーマで開催してきましたが、今回は「石」を取り上げます。

私たちの暮らしと「石」とのかかわりは、遠く旧石器時代までさかのぼり、前橋・高崎両市域では3万年前の石器群が出土しています。「石」は、ある時は暮らしを豊かにする道具として、ある時は美しく飾るための装飾品として、ある時は祈りや願いを刻み付けてカミに捧げる崇敬の対象として、またある時は住居や城等を建てるための部材として、様々な場面で利用されてきました。

「石」は旧石器時代から現代まで、私たちの生活に欠かすことのできない素材と言えるでしょう。本展示を通じて、「石」の持つはるかな歴史へと思いをはせ、私たちのふるさとへの愛着を深めていただければ幸いです。

前橋市長
由本 龍

高崎市長
富岡 賢治

主催：前橋市・前橋市教育委員会、高崎市・高崎市教育委員会　後援：上毛新聞社、朝日新聞前橋総局、毎日新聞前橋支局、読売新聞前橋支局、産経新聞前橋支局、東京新聞前橋支局、共同通信社前橋支局、時事通信社前橋支局、NHK前橋放送局、群馬テレビ、エフエム群馬、ラジオ高崎、まえばしCITYエフエム（順不同）

第一章　石を使う

サルからヒトが誕生してから、ヒトはその進化の過程で道具を作り、備え、使うことを会得していった。石は、入手が比較的容易であること、また硬く丈夫でありながら、割ることで非常に鋭い割れ口ができ、そこを刃部として使えることから、青銅器や鉄器などの金属器が使用されるまで、道具の素材として非常に重宝した。

石器製作の方法は、割って製作する方法と磨いて製作する方法に大きく分けられ、ヒトの生活が多様化するにしたがって石器のレパートリーも増えていったと考えられる。また、生業のための道具だけでなく、祭祀に使う道具としても石器は作られた。

青銅や鉄などの金属の出現により、刃物として石器は使用されなくなっていくが、穀物をすり潰したりするための石臼や、威信財、または装身具として、石を素材とした道具である「石器」は現在でも作られ続けている。また、黒曜石は外科用メスの刃部として現在でも使用されている。石器製作は太古のテクノロジーではなく、現在でも生きているテクノロジーなのである。

切る・削る

私たちの身の回りには様々な道具があふれているが、モノを切ったり削ったりする道具は私たちの生活に不可欠なものである。旧石器時代にはナイフ形石器や削器（さっき）、掻器（そうき）などがあり、獲物の解体や皮のなめしなど、様々な用途に応じて使い分けられていた。縄文時代になると削器のほかに、新たに石匙（せっぴ）が使われた。弥生時代になっても削器は使われるが、次第に鉄製の金属器が普及し、古墳時代になると金属製の小刀などに取って代わられる。

▲ 頭無遺跡第１文化層出土石器

伐る

硬い樹木の伐採や加工には、研磨された鋭い刃をもつ磨製石斧（ませいせきふ）が使われていた。復元実験では、径17cmの立木を10分で伐り倒すことができた。

縄文時代、大きなムラが営まれるようになると磨製石斧の需要も高まり、全面を丹念に磨き、より滑らかに整形して、木を伐る際の摩擦を減らし、打撃に適した重量バランスにするなど、機能的な進化がみられる。

弥生時代には、稲作農耕の伝播とともに大型で重い「太形蛤刃石斧（ふとがたはまぐりばせきふ）」が使用されるようになる。農地確保のため、広大な原野を開拓するようになり、大きな樹木を伐採する機会が増加したものと思われる。一方、木の加工には「扁平片刃石斧（へんぺいかたばせきふ）」が使われるようになる。やがて、石の道具が鉄の道具へと変わるとき、前者は「斧」、後者は「鑿（のみ）・手斧」となる。

▲ 磨製石斧（上ノ山遺跡）

掘る

ヤマイモなど地中深くの食料の獲得や、竪穴住居、陥し穴の掘削など、「掘る」ことは重要な作業であった。土掘り具と考えられるのは打製石斧（だせいせきふ）である。

縄文時代の打製石斧は、形が薄く、広く、あるいは長くなり、短冊形（たんざくがた）・撥形（ばちがた）・分銅形（ふんどうがた）の３つの形が知られている。特に短冊形は、土掘り用途に特化しており、特に大規模なムラがつくられる中期後半頃には、竪穴住居等掘削のための土掘り具の需要は高まり、大量に用いられた。

弥生時代には、打製石斧は大型化し、特に石鍬（いしぐわ）と呼ばれている。この変化は、稲作農耕普及とともに、農地の開墾を効率的に進める必要が生じたためと思われる。やがて、素材を鉄に変え、鍬（くわ）や鋤（すき）へと変化するものの、その形状は概ね受け継がれていく。

▲ 打製石斧の出土状態と陥し穴
（柳久保遺跡群）

突く・刺す

旧石器時代～縄文時代の人々にとって、狩猟は食料獲得のための重要な生業の一つであった。鋭い刃部を有する石器は狩猟の際に非常に役立ったに違いない。

旧石器時代では、まずナイフ形石器などの剥片の鋭い割れ口をそのまま刃とした石器が使われたが、後に石を細かく薄く割り剥がして槍先の形に整形した尖頭器が使われた。その後旧石器時代の終わり頃には、細くて小さい石器を木や骨で作られた柄に並べて埋め込んで槍先とした細石刃が使われた。

縄文時代には石鏃が出現し、弓矢によって小動物や鳥などの小型で動きの早い動物も狩猟の対象とすることができるようになった。

弥生時代には磨くことで刃を作り出した石鏃が使われるようになる。

▲尖頭器

▲細石刃装着例

研ぐ

石器や鉄器の成形や、磨耗した刃の研ぎ直しに使用されたのが砥石である。砥石は生活用品を長く使用し続けるために、不可欠な道具である。道具を作る工程や、研ぐ部分によって使い分けられている。

砥石の利用は古く、縄文時代には磨製石斧の刃部を磨くための置き砥石が、また、弥生時代には磨製石鏃・石包丁の刃先など細かい道具を研ぐための手持ち砥石が出土している。古墳時代には武器や工具の鉄器化により砥石の出土量が増加する。古墳時代後期以降、刀子や鎌など小型鉄器の普及により、住居跡から多くの砥石が出土するようになる。中世以降、県内で出土する砥石の多くは甘楽郡南牧村砥沢で採掘されたものである。細かい結晶で加工しやすく、江戸時代には幕府御用砥に指名されている。

▲砥石（棟高遺跡群）

挽く・磨る・敲く

石の重さや硬さ・質感を利用した、挽く・磨る・敲くという行為は旧石器時代から認められる。旧石器時代の「敲石」は石器製作用と考えられる。縄文時代になると堅果類を敲き潰すための凹石が加わり、敲石・磨石とともには縄文時代を通じて存在し、磨りと敲きを一つの石で行うことが一般化する。また食物加工用の石皿は縄文時代前期以降認められ、弥生時代まで存在する。縄文時代後・晩期には、しばしば顔料が付着した敲石や磨石が出土し、岩版や石棒等儀礼具の製作に関わると考えられる。

粉挽き具である「石臼」は中世から使用されるようになり、「茶臼」は小型で粉受けを持つ。

▲石臼
（大胡城本丸北大堀切り遺跡）

紡ぐ・編む

「編み」は大きく編物と織物に分けられる。編物は、１本の糸または紐状のもので編目をつくりながら布状に編むもので、縄文時代から見られ、敷物や衣類などを編む。織物は機織りを使い、経糸・緯糸を規則的に交差させて組み合わせる作業を繰り返して布製品を作る。

紡錘車は糸紡ぎのはずみ車で、中心の孔には回転軸となる細長い紡茎を通し、撚った糸を巻き取る。弥生時代の紡錘車は土製で、径4～5cmほどの円盤形のものが多い。古墳時代前期以降になると、蛇紋岩・滑石片岩などの石製品へ移行し、形状は円盤形から円錐形、台形へと変化する。中世以降は、古代から続く鉄製の紡錘車が使用され、石製品はほぼ見られなくなる。

▲紡錘車

量る

重さを量る道具としては、天秤と棹秤がある。天秤は棹の片側に分銅（決まった重さのおもり）を乗せ、反対側に量りたいモノをのせて重さを量る道具である。棹秤は棹に目盛をつけておもりを左右に動かし、棹が水平になった目盛で重さを量る道具である。天秤が高価なものの重さを量るのに使われたのに対し、棹秤は食料品など庶民の暮らしに必要なものに使われようだ。

分銅は決まった重さのおもりで、天秤で使われる。棹秤のおもりは分銅のように決まった重さである必要はない。

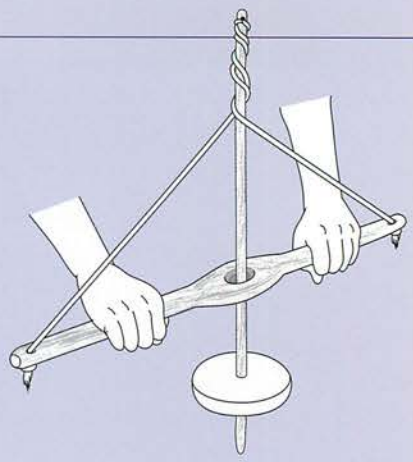
分銅形石製品（三ッ寺大下Ⅳ遺跡）▶

穿つ

古くから人々は、美しい石や動物の骨・歯に穴を開け、紐を通して装身具にしていた。また、壊れた土器や石器の破片に穴を開け、紐でつないで修復もしていた。

小さく整った穴を開ける穿孔作業をおこなうためには、専門の道具が必要で、石の道具としては石錐が使われていた。一方、細い竹や鳥の骨などを利用した管状工具も使用しており、硬いヒスイでも、さらに硬い石英粒を含んだ砂を研磨材として併用すると、竹製や木製の道具で穴を開けられる。

旧石器時代の石錐は、三ツ子沢中遺跡(高崎市)例ように石の一部を尖らせた素朴な形だ。縄文時代では、細長く整った形状で基部をつまみ状とするものがあらわれ、柄の装着が容易になり、穿孔時に力を入れやすくなっている。



遊ぶ

三ツ寺大下Ⅳ遺跡(高崎市)から出土した、平安時代の白と黒の円い石は、碁石として使われていたと考えられる。

囲碁は、今から4000年くらい前の中国ではじまったといわれ、飛鳥時代(592−710年)には日本にも伝わっていたようだ。『源氏物語絵巻』(11世紀はじめ)には、囲碁で遊ぶ貴族の様子が描かれている。その後、鎌倉・室町時代になると武士や僧侶などにも広まっていった。

古代から白と黒の自然石が使われていたが、蛤製の高級な碁石も古くからあった。明治・大正時代には、陶器や竹など安価なものもつくられた。現在はプラスチックや硬質ガラス製のものもある。

温める

温石は、石を熱し真綿や布などで包んで懐を暖める、現代のカイロのような道具である。平安時代の末頃から江戸時代にかけて使用されていた。温石に使用された石材としては、滑石や角閃石などがある。中世には石鍋の破片を転用したものも多く見られる。

温石は小さな孔があけられていることが多く、石を火鉢などで温め取り出す際に直接手で触れないための工夫と考えられる。その孔に針金状のものを用いて引っ掛けるなどして取り出したのだろう。元総社蒼海遺跡群(前橋市)出土の温石は、約10cm四方の方形で、やはり中央部に小さい孔が開いている。一方、新潟県板倉町の仲田遺跡で出土した滑石製の硯は、もともと温石として使用していたものを小型の硯として転用された可能性が高い。

墨を磨る

墨を磨る際に使用する硯は、平安時代くらいまでは焼き物(陶硯)が主体であったが、平安時代以降は石製の硯も使用されるようになる。中世〜近世の遺跡からの出土例のほとんどが、城跡や屋敷跡など身分の高い人々が生活していた場所から出土しており、墨を磨り、字を書くという習慣は、まだまだ一般家庭には普及していなかったようである。

出土した硯の中には、文字や絵が刻まれている資料もある。箕輪城跡三の丸地区(高崎市)の盛土中から出土した硯の裏面には、刀を腰にさした武士と馬に乗る人物が描かれており、当時の文化を知る貴重な資料である。

第二章　石で飾る

人類が装身具で体を飾るようになったのは、旧石器時代の頃といわれている。日本列島でも旧石器時代終末の石製の装身具がみつかっている。

縄文時代になると耳飾りや垂飾りなど様々な装身具が作られるようになる。

弥生時代になると、装身具は碧玉や緑色凝灰岩製の管玉が主体となり、墓から副葬品として出土する事例が多い。

古墳時代には、古墳の副葬品としてヒスイ製勾玉や碧玉製・緑色凝灰岩製の管玉が出土する。古墳時代後期になるとメノウ製勾玉と水晶製切子玉が新たに登場する。

奈良時代になると装身具から服装へとおしゃれの仕方が変化し、役人が正装するときに使うベルトに石の飾り(石帯)をつけ、その大きさや色などから位の違いを表すようになった。

縄文時代

縄文時代のアクセサリーの素材には、粘土や動物の骨角、そして石がある。石で作られた装飾品としては「耳飾り」や「垂飾り」がある。縄文時代前期から中期にかけて、「C」字形をした「玦状耳飾り」が出現する。「垂飾り」には勾玉や丸玉、管玉などがあり、貴重な石を用いた例としてはヒスイ製の大珠がある。また、形状が磨製石斧に似て、穴をあけた玉斧といわれるものもある。石を素材としたアクセサリーの出土は極めて少ないため個人所有というより、集団所有と考えられる。縄文人にとってのアクセサリーは「おしゃれ」を超えた「魔除け」や「威信財」という意味も持っているのだろう。

▲ヒスイ製大珠(高崎情報団地Ⅱ遺跡)

弥生時代

弥生時代になると、耳たぶに孔をあけて直接装着する耳飾りやヒスイ製大珠は姿を消す一方で、管玉や勾玉などの装飾品は引き続きつくられる。

八幡遺跡(高崎市)では竪穴住居跡から管玉が7点出土した。紐を通して首飾りにしていたと考えられるが、愛知県安城市亀塚遺跡出土の土器に描かれている刺青をした人物のように、管玉を耳飾りにしていた事例もある。日高遺跡(高崎市)では渦形をした垂飾りと考えられる石製品が方形周溝墓から出土している。西島相ノ沢遺跡(高崎市)や茨城県地域でも類似品が確認されていることから、両地域の交流を物語る遺物としても注目される。

▲へら描き人面文土器
(愛知県安城市亀塚遺跡/弥生時代後期末)

古墳時代

古墳時代になると、金属製品の加工技術の向上により装飾品の種類は増加し、大型前方後円墳に埋葬される有力者の墳墓には、金・銀をあしらった豪華な副葬品とともに、石製の装飾品が副葬されていることが多い。

長者屋敷天王山古墳(高崎市)からは、多数の玉類や石製模造品とともに、イモガイ製の腕輪を模した石製の腕輪(石釧)が出土した。石釧は元島名将軍塚古墳(高崎市)からも出土している。

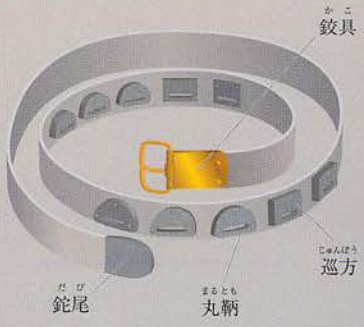
山名原口Ⅱ遺跡2号墳(高崎市:6世紀末)からは、勾玉・切子玉・管玉が出土しており、古墳時代後期まで石製玉類やガラス小玉などで構成された首飾りを着用していたことが確認される。

▲首飾(山名原口Ⅱ遺跡)

古代

7世紀前後から勾玉などのアクセサリーは少なくなり、「おしゃれ」の中心は服装に移る。

古代の役人は、儀礼などの際に官位に応じた朝服を着用し、その際、腰帯を締めた。腰帯は、現在のベルトに似た作りで、革製の帯に飾りを付けた。都の置かれた中央のみならず、地方の役所である官衙遺跡からも多く出土しており、上野国府城と考えられる元総社蒼海遺跡群(前橋市)などで出土している。



▲腰帯の模式図

第三章　石に思いをこめる

文字を刻んだ石や、供養塔、神の依り代とした岩神など、昔から人は石にさまざまな思いを託してきた。石は、風雨にさらされてもすぐには劣化しないことから、多くの人に知ってもらいたいことを末永く残していくために、現在でも世界中で使われている。

縄文時代には石棒という男性器をかたどった石器が作られ、女性をモデルにしたとされる土偶とともに縄文時代の精神文化を象徴する遺物である。

弥生時代になると、西日本では青銅器がマツリの道具として使われようになるが、東日本では青銅器を石で模倣した道具がつくられた。

古墳時代になると刀子や鎌、手斧、杵、臼玉、勾玉、剣、鏡などをまねてつくった滑石製の石製品が大量につくられるようになり、古墳の副葬品やムラのマツリで使われた。

飛鳥時代以降、日本でも石碑がつくられるようになったが、現存する古代の石碑は全国で17例のみである。その中で高崎市に上野三碑(山上碑・多胡碑・金井沢碑)が存在することは注目される。

平安時代末期以降の戦乱や末法思想の広がりから宗教活動が盛んになると、板碑や五輪塔など多くの石造物がつくられる。近世になり社会が安定してくると、現世利益の信仰が広まって薬師如来や観音菩薩が広く信仰され、多くの石仏がつくられるようになる。

縄文のマツリ

縄文時代の「環状列石(ストーンサークル)」は、集落の中の広場的な空間に大きな石を円形もしくは半円形に並べて造られたものである。造られた場所の特殊性や、大量に石を運び並べることにかかる労力の大きさなどから、集団同士の結束を固めるために造った重要な記念物であったと考えられている。

また、祭祀のための道具で、石を素材としたものに石棒がある。棒状で男性器を模したものと考えられている。材質はおもに結晶片岩や安山岩などで作られている。その他岩版は手のひら程度の大きさで、扁平な比較的やわらかい石を素材とし、表面に文様が刻まれている。

▲石棒
(西小路遺跡)

▲石棒の出土状態
(高崎情報団地Ⅱ遺跡)

古墳時代のマツリ

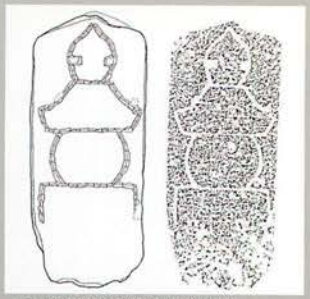
古墳において行われるマツリとしては、被葬者との別れの儀式である葬送儀礼が思い浮かぶ。副葬品を供えるという行為自体も特別な思いを込めた祭祀行為である。吉井町に所在する片山1号墳では、銅鏡などとともに刀子(ナイフ)や斧をかたどった石製模造品が多数副葬されていた。鏡を中心として放射状に配置しているかのように出土し、被葬者を見送る側の特別な意図が現れていると考えることができる。

集落遺跡においても、日常的に使用する道具とは異なる特殊な遺物が出土することがあり、子持勾玉や石製模造品がその一例である。これらは住居跡から出土することも多いが、首長居館や水田、畑、峠などから出土する例もみられ、様々な祭祀に用いられたと考えられる。

▲子持勾玉(高崎情報団地Ⅱ遺跡)

仏に祈る

中世には、供養塔や墓標として様々な石塔がつくられた。板碑は14～15世紀後半に作られた石の塔婆で、群馬県では緑泥片岩を用材とする武蔵型と呼ばれるものが代表的である。中央の碑面には仏・菩薩などの主尊を一字の梵字で表現した種子や図像などが表現される。宝篋印塔は、本来「宝篋印陀羅尼経」を収めるための塔で、相輪・笠・塔身・基礎の4つの部材からなる。武家・富裕商人などの有力者の墓塔・供養塔としてつくられ、近世に入ると大名や旗本などにも広く墓標として普及した。五輪塔は、本来仏教におけて万物を構成する五大要素をあらわす5つの部材を組み合わせて塔としたものである。中世後半には一石で造られた「一石五輪塔」も造られる。珍しい例として、五輪塔の形を板碑に彫りこんだ「五輪塔板碑」も存在する(榛名社遺跡(高崎市)ほか)。



▲五輪塔板碑(榛名社遺跡)

石に刻む

人は昔から石に文字を刻んで事績や思いを残してきた。ロゼッタストーンやハムラビ法典などが特に有名だ。日本では、飛鳥時代になると石碑がつくられ始め、現在でも顕彰碑や慰霊碑などさまざまな石碑がつくられている。

中国では、秦（しん）や漢（かん）の時代から多くの石碑がつくられている。朝鮮半島では5世紀以降に事例が増える。

日本では、宇治橋碑（うじばしひ）（京都府宇治市）が最古の事例（646年以降）である。奈良時代以降、石碑の建立が増えるが、文字を多く使う律令政治の整備と仏教の広がりが関連している。

現在日本で確認されている古代の石碑は17例あり、そのうち那須国造碑（なすのくにのみやつこのひ）（栃木県大田原市）、多胡碑（たごひ）（高崎市）、多賀城碑（たがじょうひ）（宮城県多賀城市）の3碑は「日本三古碑」と呼ばれている。

前沢和之『古代東国の石碑』山川出版社より作成

▲ 日本の古代古碑と石塔（現存するもの）

特別史跡

山上碑（やまのうえひ）

■碑の大きさ

高さ　一一一センチ
幅　四七センチ
厚さ　五二センチ

■碑文

辛己歳集月三日記
佐野三家定賜健守命孫黒売刀自此
新川臣児斯多々弥足尼孫大児臣娶生児
長利僧母為記定文也　放光寺僧

■碑文の現代語訳

辛巳年（天武天皇十年＝西暦六八一年）十月三日に記す。佐野屯倉をお定めになった健守命の子孫の黒売刀自。これが、新川臣の子の斯多々弥足尼の子孫である大児臣に嫁いで生まれた子である（わたくし）長利僧が、母（黒売刀自）の為に記し定めた文である。放光寺の僧。

前橋市山王廃寺から出土した瓦に刻まれた「放光寺」の文字

多胡碑（たごひ）

■碑の大きさ

笠石
幅　九五センチ
奥行　九〇センチ

碑身
高さ　一二九センチ
幅　六九センチ
厚さ　六二センチ

■碑文

弁官符上野国片岡郡緑野郡甘
良郡并三郡内三百戸郡成給羊
成多胡郡和銅四年三月九日甲寅
宣左中弁正五位下多治比真人
太政官二品穂積親王左太臣正二
位石上尊右太臣正二位藤原尊

■碑文の現代語訳

朝廷の弁官局から命令があった。上野国片岡郡・緑野郡・甘良郡の三郡の中から三百戸を分けて新たに郡をつくり、羊に支配を任せる。郡の名は多胡郡としなさい。和銅四（七一一）年三月九日甲寅。左中弁正五位下多治比真人による※宣旨である。太政官の二品穂積親王、左太臣正二位石上（麻呂）尊、右太臣正二位藤原（不比等）尊。

※宣旨（せんじ）　天皇・太政官の命令を伝達する文書

金井沢碑（かないざわひ）

■碑の大きさ

高さ　一一〇センチ
幅　七〇センチ
厚さ　六五センチ

■碑文

上野國羣馬郡下賛郷高田里
三家子□為七世父母現在父母
現在侍家刀自他田君目頬刀自又児加
那刀自孫物部君午足次馹刀自次乙馹
刀自合六口又知識所結人三家毛人
次知万呂鍛師礒マ君身麻呂合三口
如是知識結而天地誓願仕奉
石文
神亀三年丙寅二月廿九日

■碑文の現代語訳

上野国群馬郡下賛郷高田里に住む三家子□が（発願して）、先祖および父母の為に、ただいま家刀自（主婦）の立場にある他田君目頬刀自、その子の加那刀自、孫の物部君午足、次の馹刀自、次の乙馹刀自の合せて六人、また既に仏の教えで結ばれた人たちである三家毛人、次の知万呂、鍛師の礒部君身麻呂の合せて三人が、このように仏の教えによって（我が家と一族の繁栄を願って）お祈り申し上げる石文である。

神亀三年（七二六年）丙寅二月二九日

第四章　石を組む

熱に強く、硬く壊れにくく、腐食や劣化しにくく、大小・色彩が多様な石。ヒトは石の特性を活用することで文化を育んできた。

石を組んで炎を囲むことにより、火を制御することが可能となった。縄文時代の石組炉以降、平安時代のカマドにまで石は利用されている。石を積み上げて空間を作り、縄文時代の配石墓や弥生時代の礫床墓、古墳などを造った。これらは墓という点では共通しているが、使われる石の大きさ、並べ方、さらには加工の仕方などから石材加工技術が進歩する過程を辿ることができる。山王廃寺(前橋市)の根巻石などのように石を装飾に用いることもある。時代が進むにつれ石の加工技術はさらに高まる。石を巧みに使い、高く組み上げて防御機能を持つ城などの石垣を築き上げた。石は私達の身近な場所で使われてきた。

縄文時代・弥生時代

縄文時代、定住生活の普及から、石を組んだ炉が住居内に作られるようになる。また、縄文時代には、環状列石のような一定の規則性がみられる石組みがみられる。配石は、中期後半頃から確認例が増え、墓標や祭礼の場所、さらには天体観測の装置などと考えられる。また、住居内に石を敷いた敷石住居も中期末～後期前半に造られる。

遺体を石組みの中に埋葬する石棺墓は、古くは縄文時代後期に例があり、弥生時代では西日本にみられる。一方、長野県北部～群馬県西部の弥生時代後期には、板等を組み合わせた木棺の底に小石を敷き、周囲を石で覆った礫床墓がみられる。

敷石住居(若田原遺跡)▶

古墳時代

古墳の墳丘に施した葺石は、墳丘部の土砂の崩落を防ぎ、墳丘の防水・排水の役割を果たすとともに、古墳や古墳に埋葬された王の威容を強く印象付けたことだろう。6世紀以降、古墳には横穴式石室という埋葬施設を作るようになり、大小さまざまな石を組み合わせて死者が眠るための部屋を作った。

死者を安置するための棺にも石が用いられ、主に首長クラスの古墳に使用されたと考えられる。宝塔山古墳(前橋市)の家形石棺は、畿内の有力者のものと比較しても遜色ないつくりである。

▲宝塔山古墳石室

古代

古代には、寺院や官衙建物といった新しい機能を持った建物が築かれるようになり、建築部材としての石の使用頻度も高まっていった。

7世紀後半に築かれた県内最古の寺院跡の1つである山王廃寺には、塔心礎や根巻石、鴟尾などの緻密な加工が施された様々な石造物が残されている。また、寺院を構成する塔や金堂などの建物は瓦葺のものが多ため、基礎には礎石を据えた。

山王廃寺を築いたのは、総社古墳群を残した豪族と考えられ、石室や石棺、石造物に残る高度な石材加工技術には共通性がうかがえる。

▲根巻石

中世・近世

中近世の石組みと言えば、まず連想されるのは城の石垣であろう。箕輪城跡(高崎市)の発掘調査では、本丸・三ノ丸などの一部で石垣が発見されている。また、大堀切にも石垣が築かれていることが確認されており、土砂の流出などを防ぐ目的があったとも考えられている。高崎城遺跡(高崎市)19次調査では、本丸堀の北東角と二ノ丸堀を結ぶ南北方向の石樋(18号溝)が発見された。この石樋はU字溝のような形をした製品を組み合わせ、約19mにわたって並べられていた。この石樋の下からは、同じ位置・同じ方向の石垣水路が発見されている。

石垣(箕輪城三の丸)▶

前橋会場

2015.1.8[木]→1.13[火]
前橋プラザ元気21(前橋市本町二丁目12－1)
1階にぎわいホール

■お問い合わせ先
前橋市教育委員会事務局文化財保護課 TEL.027-280-6511

高崎会場

2015.1.17[土]→1.26[月]
高崎シティギャラリー(高崎市高松町35－1)
2階 第6展示室

■お問い合わせ先
高崎市教育委員会事務局文化財保護課 TEL.027-321-1292